



丸くなるな星になれ

「丸くなるな、星になれ」というキャッチコピーが好きです。（そのコピーを出している会社のビールも好きです）

世の中の多くの場面では、「人並み」とか「平均」とか「スタンダード」が求められます。

特に、日本はその傾向が強いです。

図形で言うと、それは「円」です。

まんべんなく、何でも出来る状態。

しかし、断言してもいいですが、そんな人間は存在しません。

凸凹（でこぼこ）しているのが、人間の自然な姿です。

強みと弱みは、誰にも存在します。

そして、強みと弱みとは往々にしてトレードオフの関係にあります。

トレードオフとは、「何かを得ると、何かを失う」ということ。

一得一失（いっとくいっしつ）とも言ったりもします。

天秤をイメージすると、分かりやすいかもしれません。



強みと弱みにも、この関係が当てはまります。

ある力が強いことによって、ある力が弱くなっているのです。

例えば、チーターという動物がいます。

走るスピードは、時速約 100 km。

動物界最速の生き物です。

チーターは、極めて体脂肪率が低いことが特徴です。

そのため体温調節が苦手で、雨などが降ると途端に風邪をひいてしまうそうです。(ボディービルに挑戦している人たちも、一見ムキムキで頑丈そうに見えて、気温の変化にはめっぽう弱く、風邪をひきやすいと聞きます。)

しかし、だからといって、体脂肪率を高めるためにぶくぶく太っていくと、最大の持ち味である「足の速さ」が出せなくなってしまいます。

結果、獲物は取れなくなってしまおうでしょう。

足の速さを取るか、体温調節の力を取るか。

片方を得ると、片方を失う。

こうした関係を、トレードオフといいます。

人間にも、このことが当てはまります。

例えば、「積極性」が高い人がいたとします。

色んな物事にチャレンジできる、思いついたら即行動。

そのフットワークの軽さがその人の強みだとします。

学校でよく聞かれる褒め言葉「積極的です」は、非常に聞こえのいい表現ですが、良い点ばかりかと思えると実はそうでもありません。

例えば、その人はおそらく「慎重さ」に欠ける部分があるはずで

思い立ってすぐ行動に移すには、全てのリスクや条件を考慮してはできないからです。

失敗も、きっと多いことでしょう。

でも、その人に「慎重さ」を求めたとしたら。

恐らく、最大の強みである積極性は鳴りを潜めます。

人の強みと弱みはトレードオフ。

では、ここで一度立ち止まって考えてみましょう。

自分の強みとは、一体何でしょうか。

自分の弱みとは、一体何でしょうか。

これは、自分では中々分からないという特徴があります。

だからこそ、「人に言われた言葉」が凄く良いヒントになると言われています。

なぜ、自分では自分の強みや弱みが見つけにくいのか。
それは、自分のことをほとんどの人が「普通」だと思っているからです。
自分のことを、心底「変わった人」と認識している人はほぼいません。
何十年と連れ添った自分のことを、たいていはノーマルな人物像として認識しています。

でも、さっき書いた通り人間には必ず凸凹があります。
そして、その凸凹にこそ、自分の強みや持ち味が隠されています。
それは、人とのつながりをもったり、人との重なりが生まれた時に気づくことが多いです。

ちょうど、パズルのピースのすべて形が違うように。
そして他者と重なった時に、自分の特異さに気づく瞬間が訪れます。
「あなたって、結構〇〇だよな」
「普通そんな風には出来ないよ」
人に、「違い」を指摘されたら、それは大きなチャンスだといえます。
そこに、自分の強みや良さやが潜んでいる可能性が高いからです。
円くなるのではない、星になれる可能性を秘めているポイントであるといえるでしょう。

なぜ、このようなことを書こうと思ったかということ、第4クォーターに入り1年生の子どもたちを改めてじっくりと見た時に、先に書いた凸凹加減が以前に増してクリアに見えてきたからです。

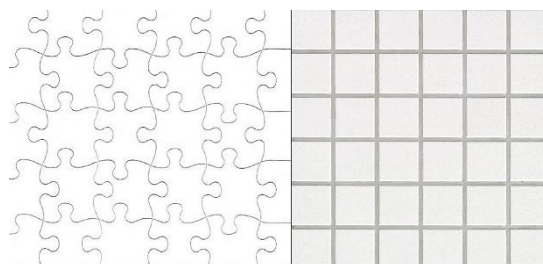
そして、従来型の学校の中ではここまではっきりとその違いを認識できていなかったらうとも思います。

これまでの学校教育では、往々にして「同じ」が求められてきました。
先にも書いた通り、特に、世界の中でも日本はその傾向が強いです。
だからこそ、「違うこと」が恐れの対象になったりもします。
違うことを恐れ、よく分からない「人並み」や「普通」などの言葉にできるだけ自分を合わせようとしています。

それはつまり、出っ張っている部分を押し込め、へこんでいる部分を伸ばそうとすることです。

それぞれ違うパズルのピースを、全て同じ形にすることにも似ています。

とても不自然な営みであることは、誰の目にも明らかです。



本来の形をゆがめようとしているのですから、かなり大変な作業であることは間違いありません。

現在、全国の不登校児童生徒は 24 万人を超えました。

20 人に 1 人が不登校という状況です。

もちろん過去最多です。

<https://www.nippon.com/ja/japan-data/h01510/>

合わせて、教職員の精神疾患も全国で 5 千人を超えるようになりました。こちらも過去最多を更新し続けています。

数字が膨らみ続けているそのデータは、これまでの学校教育の難しさや、時代に合っていない歪みのようなものを表しているはずで

す。その根底には、「同じを求め、違いを認めず」の風土が大きく影響している気がしてなりません。

だからこそ、本来の形を無理に歪める前に、そもそも「自分」とは一体どんな強みや特性をもっているのかを考えておくことが大事なのだと思います。

なぜなら、自分の欠点や苦手だと思っている所には、多くの場合強みや持ち味が隠されているからです。

先にも書いた通り、強みと弱みはトレードオフの関係にあります。

強みと弱みは、表裏一体なのです。

だから、よく人に指摘される「欠点」や「ここを直した方がいいよ」といわれることを一度冷静に見つめてみるのが大切です。

例えば「口が強くてよく友だちを傷つける」と仮に自分が思っている場合。それは、「率直な意見を伝えることをためらわない度胸がある」とも見ることができます。

そうした場合は、自分の強みが発揮できる環境や仲間を作っていくのがおすすめです。

簡単に言えば、ズバズバと言いつつ互いに価値を感じる人とつながったり、そうした力が長所として生かされる環境を探すのです。

「率直な意見」が重宝される場や仕事はいくらでもあります。

他にも、「マイペースで空気が読めないよね」とよく指摘される場合。

空気を読む力を鍛えることに意味がないわけではないですが、それよりも自分の大らかさや独特の間を生かす方法を考えてみるのも一案です。

世の中全体がアンテナの感度が凄まじく、キビキビ全員同じテンポで動いていたら、それはそれはしんどい社会になります。

その人の大らかさに救われ、それが強みとなって発揮できる役割はきっと

あるはずです。

お子さんと一緒に、どこかで自分の「持ち味」について話し合ってみるのも面白いかもしれません。

本来備わっている強みや形で、人を助けたりチームに貢献したりすることは、とても大きな幸福感を生むからです。

前号で紹介したスラムダンクもそうです。

連載が始まった当初は、「これはヒットしない」というのが識者たちの共通した見解だったそうです。

漫画界の常識として「スポーツ漫画ではバスケットはタブー」というのがあったからです。

売れるのは、サッカーや野球といった王道のスポーツばかり。

だからバスケットを扱った漫画はやめておいた方がいいと、連載前からストップがかかったそうです。

しかし、ふたを開けてみればバスケット漫画の金字塔ともいえるほどの空前絶後の大ヒットを記録することになりました。

その『スラムダンク』がヒットした秘訣とは一体何なのか。

作者の井上雄彦氏へのインタビューの内容が「座右のゲーテ」という本に書いてありました。

井上氏は次のように答えたそうです。

登場人物全てに、必ず1つ欠点をつくること。

オールマイティな人間は、絶対に作らない。

私は、読みながら大きく唸りました。

なるほど、スラムダンクに描かれる登場人物は、どこか1つや2つの欠点を持っています。同著は、次の様に続けました。

井上が言うように、人間の関わり合いが1つのドラマとして面白くなるのは、人間に癖があるからだ。それなくしてドラマは成立しない。

今は社会に、癖を愛そうという風潮があまりない。だから、ちょっとした際どい発言をすると、言葉尻をつかまえられ、それまでの功績と関係なく足を引っ張られてしまう。これは、ニーチェが指摘するところの「小さな人間の社会」である。

学校や教室を一つの社会とするならば、ニーチェがいう所の「小さな人間の社会」にはなってほしくないと思います。

だからこそ、短所も長所もどれもが平均的になるような、地ならしのような教育はしたくありません。

自分の得意なことを伸び伸びと披露できるようなチームを作りたいし、苦手な所はその凸凹を生かして上手に補い合えばよいと思っています。

そのためには、

「お互いがそもそも違うものであることを認識している」

「自分のやりたいことを思い切りできる仕組みがある」

「苦手なことは誰かに手伝ってもらえるという文化がある」

「多様性によって生まれる化学反応を楽しんでいる」

など（他にもありますが）の要素が必須であると思っています。

そして、そうした学校風土を作ることは、多くの学校で実現できていないからこそ、難しいミッションなのだとも思います。

そして、それを達成するためには、まず先を歩く大人たちが「こういう世界が作れるんだよ」ということを見せてあげる必要があると思うのです。

日本という国において、慢性的に難しくなっている状況を乗り越えていく教育文化を作るためには、そこにかかわる全ての方の力を結集させていくことが何より大切なのだと思います。

繰り返しますが、子どもたちが「でこぼこ」を持っていることは素晴らしいことです。そして、大人たちもしっかり皆さん凸凹しているはずです。

得意な事も苦手な事もひっくるめて、どれもが大切な宝であり、それがあから学校や学級は面白くなるのだと思います。

以前にも紹介しましたが、

人間は長所で尊敬されて、短所で愛される。

という言葉があります。

凸凹こそが、自分の強みであり、そして愛されるポイントとなる。

ストロングポイントで誰かに貢献し、ウィークポイントを互いに喜びをもって補い合えるようなチームを、学級の中だけでなく、学校全体として作ることができたならば、それはものすごい価値を生み出すはずです。なぜなら、ほとんどの学校でそれは実現することが極めて難しくなっているからです。

そんな文化をもった学校を、ここにかかわるすべての方々と一緒に創っていきたいという壮大な夢をふと年始に宣言してみたくなりました（渡辺道治）

[1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](https://www.google.com)